櫻時雨

（三幕）

人物

灰屋三郎兵衛　此江下來、源吾
太夫よしの、後に三郎兵衛妻おとく　同　内記
三郎兵衛父、紹山　同　掃部
本阿彌光悦　傀儡師、幸作
セキシロ大盡、實は此江應山天神、初花
小刀鍛冶、金次　同　三千代
遊客、世之助　同　玉の井
門番、與右衛門　同　八重野
灰屋番頭、五兵衛
其外侍、町人、奴、座頭、大鼓持、花車、引舟、禿、遣手、茶屋女等

時代——寛永

序幕

其一　六條廓揚屋店先

上手に入口、白地に黑く丸に櫻の花片一輪の紋つけた暖簾をかけ、正面二間青簾を下まで垂れ、其前上げ店をおろし、赤毛氈を布き、下手格子、往來の眞中へ臼を据ゑ其上へ燭臺を載せ、長蠟燭をともす。

遊客世之助、二十二三、投頭巾をかぶり、派手な裝で店にかけ、下手に座頭德市、萠黃の紋付に白袴、三味線を引き、前に遊女、太鼓持大勢臼をめぐつて踊つて居る體で幕あく。

唄

鮎は瀨に住む鳥や木にとまる人はなさけの下にすむ
吉野川には住むかよ鮎がわしの胸には戀がすむ
君が來ぬとて枕な投げそ投げそ枕に咎もなや
ゆくもかへるもしのぶの亂れかぎり知られぬ吾思

世之助　（不快の體で）エイ措け〳〵〳〵。

太鼓一　ヘイ〳〵それでは一人づゝ隱し藝をお目にかけませう。

世之助　そんなものは見たうない、早う吉野を呼んで來い。

太鼓二　それはとても今晩は――

世之助　いゝや是非共呼んで來い。

太鼓三　まあさうおせきなされますな、何を申すも全盛の太夫樣、殊に此頃はセキシロ大盡と灰屋の旦那の張合で、もめてある最中。

世之助　イヤもめてあるなら尙の事、其もめの中へ己が這入る、けふから己が揚詰ぢや。

太鼓一　何とおつしやつても一方は雲の上人、また一方は持丸長者、外から手出しも出來ませぬ。

世之助　いや〳〵己が手を出すのぢや、己も雲の上は覗いた事は無いが、金の山なら富士の山より高いのぢや。江戸の高尾でも、大阪の利生でも、出口まで送らした男、京の吉野がどれ程尊い、高が賣物、金にあかして己が買ふのぢや。

太鼓二　それは外の太夫なら知りませぬが、吉野樣ばかりは何千兩お積みなされましても、自由にはなりませぬ。先づ座におつきなされますと、本願寺樣へお目見得する樣に、おのづと膝を直します。それも其筈でござります、御容姿は申すに及ばず、お手は好し、和歌、茶の湯、香、花までおたしな

みなされましてお物ずきの面白さ、それに第一お情が厚うござります。

世之助　なさけが厚けりや尙の事、此位思うて居る此私に一寸逢うても好いでは無いか。

太鼓三　いやどの位思うてござるやら、まだ私共にも分りませぬ。

世之助　なんぢや分らん？　これ、此正月から通ひ出して、けふで幾日になると思うて居る。九十九日や百日でも、千日でも萬日でも、通うて通うて通ひつめるのぢや。

太鼓一　それはきつい御執心でござりますな、しかし茲は深草と違うて、雪の夜も春景色、こゞへ死にする氣づかひはござりませぬ故、まあ氣長うお通ひなされませ、其内には好い首尾がござりましよ、今晩は誰ぞ代りにお呼びなされまして……

世之助　エイ吉野の代りになるものがどこにあらう。さあ是非共呼んで來い、けふはどこへ來て居るな、己が直々呼びに行くのぢや。（行きかける）

太鼓一　（止めて）まあお待ちなされませ。

世之助　エイ離せ〳〵。（振拂うて行く太鼓持附いて入る）

徳　市　あのお方はえらい氣短ぢやなあ。（内へ入る）

（遣手りん内より出る）

りん　（遊女等に）此方衆は何をして居るのぢや、早う座敷へござんせいなあ。

遊女　あいなあ。

（皆行きかける。小刀鍛冶金次、二十四五、うす汚れた姿で出る、遊女をぢろ〳〵見まはす）

女一　（見とめて）なんぢや此人は、側へ寄つて下さんすな。

金次　ハイ〳〵イヤ一寸尋ねる人がござりまして——

女二　尋ねる人とは、そりや誰をえ？

金次　……吉野太夫でござります。

女二　エ、吉野様を？

金次　吉野太夫はどこに居りますな。

女三　何ぞ御用でござんすか。

金次　エ、それは……（云淀ねる）

りん　見ればうすよごれた職人風、そんな人に太夫様が御用のある筈は無い。

金次　太夫にはあるまいが、此方に少し……

女四　どんな御用でござんすえ。

金次　（思切って）逢うて話しがしたいのでござります。

皆　ハ、、、、

りん　イヤどこの田舍の人か知らぬが、太夫樣と名ざしをするからには、ちつとは噂に聞いて居さうなもの、山程お金を出す大盡が一月も二月も前から口をかけても、中々逢はれぬ御全盛に、逆立をしても一兩と出さうも無い體で話しがしたいとは好う云へた、太夫樣所か此内にはお前方の相手になる樣なものは無いわいなあ。

金次　イヤ金なら玆に五十兩持つて居ます。（懷より出す）

りん　エ五十兩？（皆驚く）

金次　まだ足らぬかは知りませぬが、私にしては五十三日、五十三本、打つて打つて夜の目も寢ずに打上げました、汗に涙のまじつた金、せめて格子の間からでも、逢うて下さる譯にはまゐりませぬか。

女一　これはまあきつい執心、そしていつぞお姿を遠目にでも見なさんしたのか。

金次　見たればこそ此煩惱、正月の屠蘇機嫌に友達に引張られ、素見に來たのが迷の元、かなはぬ事と幾度か自身で自身に異見をしても、あきらめられぬ太夫の姿、イヤいかに身分は賤しうても、金さへあれば逢はれやうと必死になつて働きました、私には精一杯、それで足らずば此兩腕、此身を打つより仕樣がございませぬ。

りん　さうぢや、其體を打ち上げて大金持か上つ方に仕變るが何よりぢや、五十兩や百兩で逢へる樣な太夫ぢやない。

金次　そりやどうしても太夫には？

りん　まあ生まれ變つてござんせいなあ。

（行きかける、金次引止める、振拂ふ、金次よろめき土に手をついて絶望の思入、禿小辨内より出る）

小辨　アもし、太夫さんがお聞きなされ、お目にかゝるといふてぢやぞえ。

皆　エイ（驚く）

小辨　盃すると云はしやんす故、此方へお這入りなさんせいなあ。

（金次驚き喜び、ものも云へぬ體）

りん　まあ盃まで？　イヤそりや餘りぢや、こんな人に逢ふ位なら今まで何人手を盡して、私にまで頼んだ人があるやら知れぬ。

女一　でも外ならぬ志をお汲みなされたのであらうわいなあ。

女二　こりや吉野樣でなければ出來ぬ事。

金次　そんなら這入つてもよろしうござりますか。

小辨　さあ此方へござんせいなあ。

金次　こりやまあ俄に寒うなつて參りました。（顫ふ）

皆　ハ、、、、、（先へ入る、金次こわ〴〵續いて入る―道具まはる）

其二　同　奥座敷

上手に一間半の大床、三幅對の掛物をかけ、續いて一間の違棚、此方銀地に桃山模樣の襖、燭臺、煙草盆など置く。

上手にセキシロ大盡、實は此江廣山、三十三、道服に公卿袴、褥に坐る、後に近習内記、掃部控へ、此方に花車おかん平伏して居る。

かん　お出で遊ばしませ。

掃部　けふは面白い御趣向があるのぢやて、一寸耳を借せい。

かん　へい〳〵どんな御趣向でござります。（側へ寄る）

掃部　（耳語して）　な？

かん　これは恐入りました、それではいかな太夫樣でも、お喜びでござりませう、どれ申付けてまゐりませう。（入る）

（引舟瀨川肇の盃を持ち、つね銚子を持つて出る）

内記　（盃を見て）　いつもながら美事でござりまするな。

應山　左の手に蟹螫を持ち、右の手に酒盃を持ち、酒船の中に拍盤せば、すなはち一生を樂しむに足るとある、古人の言葉を一つにして、蟹の盃おのづから手を勞せずして座をめぐる太夫の好みの面白さ。

掃部内記　琉球製と見えますな。

掃部　帶にはまた廣東縞とは、よのつねならぬものばかり。

瀨川　小野の小町に淸少納言、虎御前を合せても此風流には及びますまい。

應山　まあお一つお上り遊ばしませ。（蟹の機關を卷く、自から動て應山の前へ行く）

瀨川　いや蟹はおのづとまるつても、太夫が來ねば盃も取り上げる氣はせぬわい。

應山　これはお心ぜきでござんすなあ。

花には兎角急がるゝのう。

（太夫吉野、二十六、立兵庫、黑地に金で矢飛白、疋田の櫻と袋の模樣の襠襦、白地に色々の歌散らした清物廣東縞の帶、禿小辨、吉彌つれて出る）

吉野　おめづらしうござんすなあ。

應山　そりや其筈であるまいか、毎夜麓へ通うても、餘所の霞が隔てる故。

吉野　なんぼ霞が隔てゝも、お心一つで霽れ樣に？

應山　心の月も光無く、曇るは何の爲ぢやゝら。
吉野　花もおぼろの春の宵、晴れぬが浮世でござんすなあ。
掃部　いやけふはお顏を見て日本晴、曇らぬ内が一刻千金。
内記　花に花そふ御趣向を早うお目にかけませう。
應山　フム、用意よくばこれへ出しや。
掃部　かしこまりました、それ！（おつねに）
つね　ハア。（入る）

（天神初花、三千代、玉の井、八重野、梅、桃、椿、山吹の花桶を持つて出る）

應山　「さぞ櫻我は廓の栄種さへ」と、いつぞや君の述懷をけふはいさゝか慰めんと、名所の花を集めたのぢや。

初花　先づ咲きそむる北野より、香も四方に飛び梅と、
三千代　續いて開く桃山の、城は落ちても三千代草、
玉の井　八千代變らぬ椿寺、色は五つに咲き分れ、
八重野　かげも寫して鏡草、井出の里まで君が爲、
掃部　櫻は君の名に讓り、わざと省きし花の園、

内　記　菜種などには及びますまい。

應　山　どうぢや、少しは霽れたかな。（盃をさす）

吉　野　ほんにうれしい此御趣向。（受ける）

掃　部　こりやお過しなさらずばなりますまい。

應　山　予も十分過すであらう、蟹より手づから返盃しやれ。

三　郎　（向にて）いや待つた〳〵其盃こちへ指して貰ひませうか。

（灰屋三郎兵衞、二十八、紋付着流し、織物の帶、蒔畫の印籠、太鼓持に櫻の花車を引かして出る）

掃部、内記　ヤ、これは？

三　郎　花を色々集めても、花の君の櫻を省き、何でそれが花園ぢや、君の色はまた格別、君と櫻と並べてこそ、花と花との色くらべ、何と太夫、どちらの花が氣に入つたな。

吉　野　さあそれは？

三　郎　京近邊の花を寄せても、高の知れた奢の沙汰、これこそ大和の吉野から取りよせた山櫻。

掃　部　あの大和から！

三　郎　いやさ太夫、どちらの心が深からうな。

内　記　いや金で寄せた山櫻、なんで心のしるしにならうか。

三郎　心ありやこそ金も惜しまぬ。位ばかりで花が咲かうか。

掃部　何と？

三郎　セキシロでも節季候でも、此里には上下は無い、金であらはす心の深さ、知らずば教へて上げませうか。

内記　エイ無禮申すな。（立ちかゝる）

應山　アこれ（制す）

三郎　さあ太夫、其盃はどちらへ指すな。

吉野　さあこれは……

應山　其盃は？

光悅　（下手より）私に指して貰ひましよ。

（本阿彌光悅、七十餘り、剃髮、道服、質素な衣服、花車の止めるのを拂ひながら出る）

かん　これ理不盡な事なされますな。

光悅　エイ除け〳〵

應山、三郎　（見て驚く）ヤアあなたは——

光悅　いや私は何でも無い、餘り噂が高い故、どんな女であらうかと、唯顏を見に來たのぢや。

かん　ヤァ此人は氣が違うたのか――

光悅　いや氣ちがひでもない、あばれ者でもない、唯見ようとも云ひはせぬ、金が入ると聞いた故、ついに持たぬ財布持つて來た。（懐より取り出しておかんに渡し）それ、これで見せてもよからうな。

かん　（受取つて）エ、これは――

光悅　（つか〳〵と吉野の側へ寄り其顏を見て）成程これは美しいな。

吉野　一つお上りなされませ。（盃をさす）

應山　ヤ、其盃を、

三郎　あの此お方に？

吉野　アイナァ。

應山　そりや何故。

吉野　お見受け申せばお位も、お金も無ければ色氣も無い、何の思もないお顏で御覽なさるが誠の譯知り、何とさうではござんせぬか。

光悅　成程こなたは利發ぢやなあ、これでは人が迷ふ筈、（飲んで）してこれは？

吉野　私にお返し下さりませ、お流受けて心の塵を洗うて見たうござんすわいなあ。

光悅　いやこなたに返せば毒になる、とてもの事に持つて行かうか。

かん　エィ此人が欲の深い、其盃は廓の名物、持つて行かれてたまるものかいな。

光悦　盃ばかりか名物の太夫も持つて行きたいな。

かん　エィ？

三郎　（せき込んで）いや太夫は私がつれて行く、花車、（おかんに）それ千兩（金箱を花籠より出し）親方に渡してたも、さあ身請したくけふから吉野は私のもの、誰であらうが、彼であらうが、指もさゝせはせぬぞよ。

應山　何と？

三郎　さあ太夫、用意しや、もう片時も茲には置かぬ、直にこれからつれて行く。

光悦　つれて行くとはそりやどこへ。

三郎　さあ取りあへず下屋敷へ。

光悦　其下屋敷はこなたのものかな。

三郎　エ？

（光悦懐より書付を取り出し三郎兵衛に渡す）

三郎　（開き見て）何、勘當の事――（驚く）

光悦　どうぢや、それでも身請をするかな。

三郎　こりやまだどうして、あなた樣が？

光悅　さあ實は今親御の處へ何氣無く行た所、常ならぬ顏の色、どうなされたと聞いて見れば、豫て悴の六條通ひ、しかも代々お出入する應山公と張合ふとは、申譯も無い不仕末、勘當すると云はれる故、まゝお待ちなされ、それでは私が行て見て、どんな樣子ぢや見て來やう、異見も出來ればして見やうと、勘當狀はあづかつて、來て見れば此有樣、こりや迷ふ丈迷ふも好からう、確に狀は渡します、それとも身請は止めるかな。

三郎　何で思ひ止まりませう。

光悅　それなれば是非が無い、勘當受けねばならぬぞや。

三郎　さあそれは……

掃部　矢つ張止めて内にすつ込み、金倉の番でもするが好い。

三郎　エィ金に心は殘らぬが、此身ばかりか太夫まで翌から何とならうやら——

吉野　そりや何を云はしやんす、いつそ本望ではござんせぬか。

三郎　そりやまた何故。

吉野　今まではあなたも大盡、お心に金氣がある、これからはお心ばかり、私も唯の女子になり、飾らぬ色は心の誠、思ふ暮しをしませうわいなあ。

天神皆　そんならいよ〳〵太夫さんには？

吉野　後とも云はず直これから、花車樣、早う其お金を。

かん　かしこまりましたわいな。（金を持て入る）

吉野　（襠裲を脱ぎ）此打掛は揚屋へ形見、持物はそなた樣へ分けて取つて下さんせ。

天神皆　有難うござんす。

りん　其盤の盃は？

吉野　（光悦に）これはあなたへけふのお禮に。

光悦　持つて行てももう遲いが、殘して置いたらまた煩惱――（ト應山の方を見て下手へ行く）

應山　イヤ太夫、餞別しやう。

吉野　エ？

（應山懷より色紙を取り出して吉野に手渡する）

吉野　（見て）世の中よ道こそなけれ思ひ入る、山の中にも鹿ぞ鳴くなる。

應山　山の奥とあるべきを、山の中と書き誤まり、それが却つて名物と世にもてはやされし小倉の色紙。

吉野　ほんにこれから思ひ入る、山の中に鳴く鹿の聲を枕の詫住居。こりや有難う戴きます。假令何となりましても、これは屹度離しますまい。

應山　何のそれに及ばうぞ。せめて心の一端を受けてたもれば、それで滿足。

吉野　そんなら皆さん。（立つ）

應山　もう行きやるか。（名殘惜い思入）

光悅　咲く間短かき山櫻、（吉野から三郎兵衞を見て哀の思入）

三郎　落ちて流るゝ谷河の、（不安の思入で吉野と顏を見合はせる）

吉野　末はいづくへ行かうやら、（ト三郎兵衞を促がして下手へ行く）盛りも夢となりましたなあ。

其三　同　廊外

上手に門、側にいとまの柳、さらば塀、辻行灯、後黑塀、此方に茶店、編笠をつる、後田、門内樓々灯ともつた體。

門番與右衞門、袴をはき、草履、棒をつき、醉うて門内より出る。

與右　あゝ醉うた〳〵（床机にかけ）水を一杯下され。

茶店女おとせ（内より）ハイ〳〵（茶椀を持つて出で）オ、與右衞門さん、好い御機嫌でござんすなあ。

與右　イヤ餘所と違ひ、玆の門番が眞面目では面白無い故、一寸一杯引つかけたて。

とせ　でもそれではお役が勤まりますか。

與右　勤まるとも〳〵どれ玆でかうがん張つて、出入の人を吟味しやうか。
とせ　それでは此方が迷惑でございます。
與右　そつちの迷惑は一寸ともかまはん。ヤア色々な奴が來るぞ〳〵。
（座頭德市門内より出る）
與右　待て。
德市　ハイ、どなたでございますな。
與右　どなたとは己を知らぬか。
德市　ア、與右衞門さんぢやな、何ぞ御用でございますか。
與右　さうぢや、一「吉野の山」でも歌うて見い。
德市　「吉野の山」？　それはもうせんど彼方で歌うて來ました。
與右　いや是非其歌はぬと通さぬぞ。
德市　何を云はつしやる、御免々々（急いで入る）
與右　ヤイ待て〳〵エイ盲目の癖に早い足おやなあ。
（奴傳助醉うて出る）
與右　待て。

傳助　何だ、待て？　己を呼ぶのは誰だ。

與右　（謠調にて）　抑々これは元祖與右衞門九代の後胤、代々與右衞門門番なり。（棒を以て身構へする）

傳助　此奴惡く洒落るな、好し、それぢや己も辨慶で受けてくれう。（謠）打物わざにてかなうまじと草履ざら〳〵押しもんで、東方高尾太夫、西方夕霧太夫、中央吉野太夫の打掛にかけて祈り祈られ、門番次第に遠ざかれば——

（二人舟辨慶の眞似する。門内より若侍春之丞を送つて天神初花出る）

與右　ヤア義經に靜が來た。（謠調にて）　いかに義經、思ひもよらぬ浦波の——（尚ふ）

春之丞　エイ無禮者め。（突く）

（與右衞門、傳助をかしい身振で入る）

春之丞　門番まで酒に醉ふとは、これも廓のけしきぢやなあ。

と　せ　（内より刀を持つて出て）これでござんしたなあ。

春之丞　さうぢや、（大小を差す）

初　花　また翌もござんせや。

春之丞　念を押すには及ばぬわい。

初　花　そんなら春之丞さん。

春之丞　さらば。

初花　おさらばえ。

（二人別れて左右へ入る、とせも内へ入る、金次腕を組み門内より出る）

金次　オ、玆はもうさらば垣、思ひ思うた心の一端、直々逢うて盃して、それで思ひ切れよとは、慈悲か、無慈悲か、身に染む異見、これではまたとも云はれぬ仕義、と云うて此儘歸つても、どうして思ひ切られやう。今の一目の離れぬ中、此身もいとまの柳としやうか。

とせ　（内より湯を汲んで出て）まあお休みなされませいなあ。

金次　（無意識に茶椀を取り）いや折角呑んだ酒の香を消してしまうては勿體無い。（下へ置く）

とせ　何の消えますものかいな、尚更殘る樣にしてござります。

金次　いや〳〵あの一杯が末期の水ぢや。

とせ　エイ元の悪い事を云はしやんすな。

金次　いや元が悪い所か、目出たいも目出たいも、私の一生の大吉日、こりや一筆禮を云はずば、よもや夢にも思ひ出しては下さるまいなあ。

とせ　それはどなたでござります。

金次　イヤ一寸硯を貸して下され。

とせ　へィ〳〵此方に紙もござります。

金次　そんならそこで書きませうか。（茶店の内へ入る）

唄

吉野の山を雪かと見れば、雪にはあらで花の吹雪よ

（三郎兵衛父紹由、六十餘、上品な町人風で出る）

紹由　（歌を聞て立止まり）あの歌は三筋町、文句も同じ吉野とは、折も折とて氣にかゝる。雪か、花か、花吹雪　何にしても散らさねばならぬかなあ。

唄

君故ならば雪の野に寢まし、よしや此身は消ゆるとも

（紹由茶店の前まで來る、金次内より出る。文を落とす、すれちがうて入る。紹由いぶかしげに見かへり、文につまづく）

紹由　（取上げて）何ぢや吉野さまへ――何、吉野――（あわてゝ開き）先程は思ひがけなくお盃下され、こまぐ〳〵との御異見、うれしく又悲しく存候、所詮ながらへ候はば無用の煩惱晴れ申すまじく、今のお姿の目につき候中、桂川へ身を捨て申候、決してお恨も何もこれなく、唯あはれと思召し下されれ候はゞ快よく相果て申すべく候――アこりや死ぬ人がある相な。（文を落とす）恐ろしやノ〳〵それ

程までに迷はす女、とても思ひ切るまいな――しかし思ひ切らぬばかりか、若しやこんな身の果にあれもなりはせまいかなあ。

唄

思ひ切れとは身のまゝか、誰かは切らん戀の道

（世之助きよろ〳〵門内より出る）

紹　由　もし一寸お尋ね申します、吉野太夫はどこに居りますな。

世之助　何、吉野？　オ、さうぢや。私と一緒に行きませう。（紹由の手を取る）

紹　由　こりや何をなされます。

世之助　さあ、ござれ、私がこれから身請する。（引張る）

紹　由　エイ何を云はつしやるのぢや。

世之助　何を云はうぞ太夫の事、吉野より外に云ふ事無い。

紹　由　こりや氣が違うたさうな。

世之助　氣も違はう、死にもせう、いつそ其男を殺してやらうか。

紹　由　エイ。

世之助　さうぢや歸途を待受けて一打に斬つてやらう。

紹由　めつさうな、そんな事を云はずに、内へお歸りなされませ、親御が案じてござりましよ。

世之助　私に親はござらぬわい。

紹由　親が無いとはお氣の毒な。

世之助　親が無い故勘當もされぬのぢや。

紹由　エ？

世之助　親より子より吉野一人、も一度顏なと見たいものぢやなあ。（又門内へ入る）

紹由　これは氣ちがひ、あれは身投げ、幹は何にならうやら——

唄

破れ菅笠しめ緒が切れて、さらに着もせず捨てもせず

（三郎兵衞編笠をかぶり、吉野をつれて門内より出る。紹由行きちがふ）

三郎　どうやらあれは——

吉野　エ？

（世之助つか〳〵と出る。追うて行きかける、紹由止める、應山後へ出て、名殘惜しげに見送る）

——幕——

二幕目

櫻町詫住居

正面一間ばかりの床、前の小倉の色紙の軸をかけ、下に花活、はしばみに寒菊、右手壁、文反古の腰張、所々雨洩の體、出入口、座敷中央に爐を切り釜をかけ、下手下まで一杯の吉野窓、上手後へ下つて小間、前庭、手水鉢、植込少々、四目垣に枝折戸、外縦に往來、向に町家、桔梗、晉羽川の流、三郎兵衛上手で陶器を作り、お德正面の間で扇の地紙を折つて居る體で幕あく。

傀儡師幸作出る、窓の前で人形を使ふ。

唄

あはれなるかな對王丸、安壽姫のはらからは、三桝太夫の家を出で、別の辻まで來りしが、山へ行くかよ弟よ、濱へござるか姉上よ、やがて歸らせ給へや、さらば〳〵と立別る。

三郎　おとく、何なとやつてやりや。

とく　ハイ〳〵（立つて外を見る）

幸作　（其顔を見て）オ、太夫様ではござりませぬか。

とく　御存じでござんすか。

幸作　知つて居る段ではござりませぬ、二三度もお座敷へ呼ばれまして、お目にかけた事もござります。それでは茲が唯今の――（四方を見まはし）まあ變つたお住居でござりますな。

とく　住居も變れば氣も變り、結句氣樂でござんすわいな。

幸作　お氣樂と云へばこれはお氣樂な、私も氣樂な人形まはし、時々御伺ひ致しませう。

とく　また寄つて下さんせいなあ。（簪を拔いて渡す）

幸作　エ、こりや結構な品、こんなものを戴きましては濟みませぬ。十文でも二十文でも其方がよろしうござります。

とく　其十文も無い程に、それなと持つて行て下さんせ。

幸作　エ、十文も？　イヤ無うて仕合せでござります。それでは頂戴致します。しかし以前の事を思ひますと、安壽姫よりお變り樣――（また人形を使ふ）

唄

濱邊になれば姉君は、持ちも習はぬ桶振りすて、あの山戀ひし弟の、柴を刈りたる事は無し、木の根、岩角踏みすべり、谷間に落ちて倒るらん、いたはしやかなしやと、山と濱と

に泣き居たり。

ア、こりやお客樣より人形使の方が悲しうなつてまゐりました。（氣の毒の思入で入る）

三郎　イヤ兎角知つて居る者が多うて困るのう。

とく　これでは眞に山の中へ這入つた方が好うござんす。

三郎　それではまた職がなくなる。こんなはかない土なぶりでも、どうかかうか暮らされるのに、山の中では落葉を着て、木の實でも拾はにやなるまい。

とく　寒山と山姥の二人暮らしは誰の畫にもござんせぬなあ。

二人　ハ、、、、、、、

（灰屋番頭、五兵衞、五十代、羽織着流しで出る）

五兵　お内でござりますか。

とく　オ、五兵衞さん、さあお上りなせれませ。

五兵　（上へあがつて）こりや御勢が出ますな。

三郎　勢を出さねば口が乾上るわい。

五兵　こりや若旦那には大分汐が染みましたな。

三郎　汐は染んでも浮び上らぬ、浮世の波は荒いものぢやな。

五兵　其荒浪も御本家の大船へお歸りなされます御量見はござりませぬか。

三郎　無い事は無けれども、勘當といふ二字には寄りつく事も出來ぬでないか。

五兵　さあ其御勘當もお心次第で、ゆりまいものでもござりますまい。

三郎　心次第とはそりやどうぢや。

五兵　（おとくを見て憚る思入）それは茲では云ひ兼ねますが……

とく　どれお茶を入れませう。（奥へ入る）

三郎　何ぢや云兼ねるといふ譯は。

五兵　あの太夫でござります。

三郎　おとくをどうと云ふのぢやな。

五兵　お別れなされませ。

三郎　エ？

五兵　不粋な事をいふ樣でござりますが、何を申すも太夫から、かういふ事になりました故、側にお置きなされましては、いつまでも果しがござりませぬ。何ほ御苦勞なされましても、何をしほにゆりませう、大旦那の思召は伺ひませぬが、太夫さへおいなしなされましたら、それが第一御改心の證據。それを件に御親類中からお口添へなされましたら、つい埒のあく事と存じます。

三郎　オイ五兵衛、お前は貧乏人の内に生まれて、其年まで灰屋の番頭、まだ金を使うた事が無い故、金の値打を知らぬな。どうぢや三日程大盡にしてやらうか。

五兵　エ？

三郎　私は少しばかり金を使うたが、今から思ふとありや金が遊んだのぢや。追從も輕薄も皆金にして居たので、私の心は有頂天、どこへやら飛んで居た。所が金が無くなつたので、驚いて我に歸り、人の心も世の味も腸に染込んだ。成程本家には金はある、しかし本家に居る内は遊女通をせぬまでも、魂は抜けて居る。おとなしうして居た所で金の番人、今では一文も無い暮らしぢやが、此あばら屋にも心はある、魂がすわつては、宮も藁屋も同じ事、薄茶の泡を呑む味はこりや今まで知らなんだわい。

五兵　イヤ貧惜をおつしやりますな。

三郎　何ぢや貧惜ぢや？　イヤ分らぬ奴ぢやな、まあ一服呑ましてやらうか。

五兵　いえ、もうそれには及びません。

三郎　（茶碗二を取出して）これを見い、此方は加藤清正が朝鮮から持つて歸つて太閤に獻上した利休の銘もある茶碗ぢや、千金でも得難からう。此方は私がそれを見て、其風韻を呑込んでこしらへたもの。丁度これが前と今の私の身の上、内に居る時分は金はあつても利休の茶碗ぢや。名器といふばかり

で此通底が無く、茶所か水も呑まれぬ。今では粗末な樂燒ぢやが、底もある、味もある。

五兵　でも千兩の茶碗で呑んだら、一しほ味が好うござりましよ。

三郎　何ぢや味が好い？　イヤどこまでも分らぬ奴ぢやな。

五兵　さういふ貴君が、どこまでも分りませぬな。

三郎　何ぢや私が分らん？

五兵　分らんぢやござりませんか。

三郎　エイお前が分らぬのぢや。

五兵　いえあなたが！

三郎　何お前が！

五兵　もう好い加減に目をおさましなさりませ。

三郎　何目をさませ？（くわつとなつて烟管で利休の茶碗を打つ、二つに割れる）

五兵　（仰天して）　まあ何をなされます、千兩の代物を！（ト大な聲でいふ）

三郎　（氣を一轉して）ワハ、、、、、、、（痛快に笑て）　かう割つた所は遊女通に身代を潰した所、大家でも、名器でも、割らうと思や、たつた一打。

五兵　勿體無い事なされますな。（トあきれる）

三郎　これで金の値は無くなつた。何ほこれを繼ぎ足しても元の樣にとてもならぬ。それより別にかう、したら、風韻もあり、滿足な、始めて甘い茶が呑める。（ト自分のつくつたのを取上げる）

五兵　何の甘い事がござりませう。

三郎　イヤどこまでも分らぬ奴ぢやな、こりや是非一服飲んで見い。

五兵　いえもう結構でござります、またお伺ひ致しませう。

三郎　いや茶が呑めぬ樣な奴は來るには及ばぬ。

五兵　これは恐入りますな。（門を出て）イヤよう迷うたものぢやなあ。（心配の體で入る）

（おとく奥より出る）

三郎　おとく聞いて居たか、さて〳〵話せぬ奴ぢやのう。

とく　それではあなたはどうあつても？

三郎　何の別れて好いものか。

とく　でも蓄はいふに及ばず、烟も薄いけふ此頃。

三郎　假令飢に迫つても心の内は安樂世界。

とく　あの結構な御本家も？

三郎　情が無くば石瓦。

とく　壁もあらはの詫住も？

三郎　あはれが結句うれしいわい。

とく　そりや眞實でござんすか。（ト泣く）

三郎　ア寂の味が分つて來たなあ。

（尺八の音――三郎兵衞立つて茶碗を持つて出て行く）

とく　（門口まで送つて其跡を眺め）月は西、君は東へあすの朝、それは昔のきぬ〴〵や、今は日かげの共住に、馴れぬ手わざも厭はぬが、君の爲にはうき世の中、君の心は思切り、雪に任した破垣も、兎角案じる女氣は里の思にまた一倍、せめて釜には松風の音たぎらせて置かうわいなあ。

（上へ上つて茶の仕度にかゝる、道具半まはりになり、町人二人話しながら出る）

一助　（門より覗いて）オ、居る〳〵太夫――太夫さん。（お德顧みもせず炭をつぐ）

二八　吉野はん――吉野はん――（お德尙顧みず、釜をかけなどする）

一助　太夫さんといふたら、これ丈呼んで居るのに見向もせぬとは、聾にでもなつたのか、それでは此音羽川も聾川か、聾谷と變へねばならん。

二八　ワハ、、、、、

（世之助鉢叩の姿で瓢箪を打ちながら足早で出る）

世之助　南無阿彌陀々々々々々々（門に立つ）

一　助　イヤもし茲の内は聾ぢや故、何ほど叩いてもあきません。

世之助　左樣でござりますか。

二　八　以前は全盛の吉野太夫も、落ちぶれて聾とは、變れば變るものぢやなあ。

世之助　エ吉野？　さては茲が太夫の内でござりますか。

一　助　左樣ぢやわいな。

世之助　うれしや〳〵――（内へ飛込まうとする）

一　助　（止めて）これ此方はどうするのぢや。

世之助　知れた事、太夫に逢ひに――

二　八　それでは此方も執心ぢやな。

世之助　執心なりやこそ鉢叩に姿を變へて所々方々尋ねてあるきましたわいな。

一　助　こりや私等よりはまた上手ぢや、しかし今では人の花妻、うつかり手出しも出來ません。

世之助　エイ何であらうが、かまやしません、是非共逢うて積もる恨を云ふて云ふて云ひのけます。

二　八　それは恐ろしい意氣込ぢや、しかしどんな恨があるのぢやな。

世之助　そりや知れた事、思ひに思ふて通ふたのに、一度も顏さへ出しもせず、とう〳〵人に根引きされ、

こんな所に隠れ住とは、恨めしいではござりませぬか。

一　助　それ位ならこなたに限らぬ。

世之助　いゝや此恨が外にあらうか、己れ太夫、もう逃げうとしても逃がさぬぞよ。（内を見込む）

二　八　こりや大分怪しいぞ。

一　助　氣違の鉢叩とは面白い、さあ一つ踊つて見さんせ、そしたら太夫が逢ふといのう。

世之助　そりや本間でござりますか。

二　八　本間とも〳〵。

一　助　さあ〳〵踊つた。

二　人　踊つた〳〵。

唄

諸法實相と聞く時は、峰の嵐も琴の音か、萬法一如と觀ずれば、水の流も君の聲、君は此世にましませば、かゝる悲觀は賴無し。無常眼の前に來て、火宅を出でよとすゝむれど、執着の心深ければ、聞て驚く事もなし。東岱前後の夕煙、北嶺朝暮の草の露、おくれ先き立つ世の中に、只戀のみぞ夢ならず、唱ふれば佛も君となりにけり、南無阿彌陀々々々々々

（世之助瓢を叩いて踊る）

二人　ハ、面白い〳〵さあ行きませう。（行きかける）

世之助　アもし太夫に逢はして下さりませぬか。

一助　太夫は見ざる聞かざるの、猿になつてしまふたわいな。

二人　ワハ、、、、、、（二人入る）

世之助　エイ嘘をつきをつたな、待て〳〵〳〵（追うて入る）

（時雨の音。紹由丁稚つれ傘さゝずに出る）

紹由　こりや大分ひどうなつた、一走り行て傘を借つて來てくれ。

丁稚　かしこまりました。（走つて入る）

紹由　どれ向の軒下で待ちませう。（窓の前へ寄る、伽羅の香のする思入）アこりや柴舟ぢやな。（耳を立てゝ）釜にも湯のたぎる音、ア奥ゆかしい住居ぢやなあ。

とく　（窓より覗いて）そこでは雨がかゝります、まあ此方へおはいりなされませいなあ。

紹由　有難う存じます。

とく　止むけしきはござりませぬ、御遠慮なうどうぞ此方へ。

紹由　ハイ〳〵イヤこりやどうも仕樣がない、それでは御免なされませ。（内へ入り上り口へかける）

とく　そこは端近、とてもの事にこちらまで。

紹由　左樣でございますか、不作法ながらそれでは一寸。

（上へあがり、あたりを見ながら坐る。琴の音――おとく茶を立てゝ出す）

唄

花は雪、時雨は誰の涙ぞや、えにしあやしき假の宿、知るも知らぬも夢の身の、何をへだてん世の中は、さなきだに、墨繪にかきし松風の聲。

紹由　（床より爐を見まはし）ア珍らしい小倉の色紙、「山の中にも鹿ぞ鳴く」、花の雫は此時雨か、松風は與二郎の釜に波立つ阿彌陀堂、樂は光悅でございますか。

とく　いえあるじの手づくねでございます。

紹由　それは一しほ面白い、槇立つ山の秋の暮、さびしい中に一色のもみぢの陰の此手前、結構なお茶でございます。

とく　これは痛み入りまする、も一つ如何でございます。

紹由　いやもう十分でございます、圖らず上つて此御馳走――失禮ながらお召使も無く（家の樣を見まはし）御主人は御不在と見えますな。

とく　ハイ一寸そこまでまゐりました。

紹由　そして只お二人のお暮らしでございますか。

とく　左樣でございます。

紹由　（そこにある短冊を取上げ）何、

やれまどに伽羅の染込む時雨かな

イヤこれでこそ眞の風雅ぢや。世を遁れた樂隱居遊んで暮らせば穀つぶし、世を捨てた道心も功德が無けねば死人も同然、職もあり、樂もあり、詫もあり、花もあり、これが誠に此世の味、いや茶の湯の味でございます。御主人はどなたやら、私にも悴が一人ございましたが、酒は飲んでも茶は飲まず、遊は知つても道は知らず、たわけを盡した其果は、とう〳〵勘當しましたが——

とく　エ、そしてどうおなりなされましたえ。

紹由　どうなつたやらそれぎりに、行衞も今に分りませぬ。

とく　なぜお免しなされませぬ。

紹由　それは免す事は出來ませぬ、此世の味を悟らねば、内へ入れても人にはなりませぬわいな。

とく　そんならお悟りなされましたら？

紹由　いやまだも一つならぬ譯がございます。

とく　して其譯とおつしやりますは？

紹由　さあ其譯は——こりや一寸申されませぬ。

とく　それではいつまでも其儘に？

紹由　さあして置かねばなりませぬ。

とく　あのまあ一生？

紹由　氣強いと思召すか知りませぬが、それもまた此世の道、魂から磨かねば、身も立たず、家も立たず、まんざら教へなんだのでもございませぬが、不足が無い丈氣儘となり、魂抜けて色狂ひ、今では何となつたやら、まだ迷うて居るか、悟つたか、氣がちがうたか、死んだかと、秋の夜長の寢覺がち、やう〳〵寒うなるにつけ、京の町をうろ〳〵と、耻かしい姿しをらぬか、海山隔てた遠國で苦しいわざでもして居るかと、問ふに問はれぬ其せつなさ。思のせいか身も弱り、先も見える老のいのち、もしやこれきり逢はれぬかと、人知らぬ涙もこぼしますわい。（目を拭ふ）あゝこれは私とした事が、うか〳〵と愚痴な話、おはづかしう存じます。

とく　なんの〳〵私も此身につまされまして……（暗涙を飲んで）も一つ如何でございます。（また立てにかゝる）

紹由　有難う存じます。

（應山下來源吾、二十代、總髪、羽織袴、急いで出て、内へ入る）

源吾　主人は其方か。

紹由　いゑ私は餘所の者でござります。

源吾　それではどこへまゐつたな。

とく　只今一寸出ましたが、何ぞ御用でござりますか。

源吾　何ぞ用とは白々しい、きり〳〵早く出してしまへ。

とく　出せいとはそりや何を？

源吾　エィまだとぼけをる、利休の茶碗ぢや。

とく　エ？

源吾　ありや此方から註文して、體よく繼げいと申付けたに、にせものをこしらへて、本物を打ちわつたとは、けしからぬ横道者、かれこれ云はず出してしまへ。

とく　でも割つたに違ひござりませぬ。

源吾　ではまことに？　イヤいよ〳〵免されぬ不屆奴、かの品を何と思ふ、千金萬金を積めばとて再び手に入るものと思ふか。御祕藏の中の御祕藏を打ちわつたで濟むと思ふか、われましたと言上なら うか、腹切つて申譯、此方はいとはぬが、そればかりでも濟まぬわい。主人の首をお目にかけずば、お怒はよも解けまい。さあ早くこれへ出い。

とく　でもまだ歸りは致しませぬ、まあ一服お上りなされませ。

源吾　エィ此さわぎに茶所か、一體何として打ちわつた。

とく　さあそれは……

源吾　よも亀相とは云はれまい。

とく　さあそれは……

源吾　矢張隱して居らうがな。

とく　何の左樣ないつはりを——

源吾　そんなら何故。

とく　さあそれは……

源吾　さあ？

とく　さあ……

源吾　さあ、云譯無くば覺悟致せ。

とく　（うなづき）よろしうござりまする、そんならどうぞ私をおつれなされて下さりませ。

源吾　何と申す。

とく　ありや私の亀相でござんす。

源吾　何其方の？

とく　是非命が入る事なら、主人より私を斬り、云譯立てゝ下さんせいなあ。

源吾　フム好い覺悟ぢや。それへ直れ。（刀を抜く）

とく　（茶碗を取上げ）今を最後の此一服。（靜に飲み終つて紹由に）後でよろしうあなたから——

紹由　（先から横へ寄つて見てゐて、感服の思入、此時進んで止めて）まあ〳〵お待ちなされませ、詳しい譯は分らぬが、兎に角われた利休の茶碗、いかに名器と云ひながら、人の命に替へいでも、どうか仕樣があり相なもの、何ぞ云譯はござりませぬか。

とく　さあ其譯は知りませぬが、一寸聞けばひどい缺け樣、國も時代も違ふた土で底をつけ繼ぎ足しましても、尙更風情がござりませぬ故、其風韵を呑込んで、新に造つて見ますれば、元があつても無用の缺け、元があつては迷の種と、それで碎いてしまひました。

紹由　イヤこりや面白い、そこぢや〳〵茶の味はそこにある。缺けた名器を珍重しやうより其風韵を得たからは、元の形を無にするとは、禪家の風もある樣な、（源吾に）あなたの御主人はどなたやら、こりや其通り言上なされたら、よもや不埒とはおつしやりますまい。

源吾　いや薄暗い言譯ぢやが、兎も角其旨を申上げる、しかし何と御意あるやら、後刻再び參る故、逃げ隱れなど致すな。

とく　卑怯な事をする樣な私共でもござりませぬ。

源吾　好し、それでは重ねて參るであらう。（入る）

とく　お蔭で一先づ濟みまして、有難う存じます。

紹由　何の〳〵しかしまた何といふて來やうやら、私も氣かかりでございます、こりや後程聞きにおこします故、御遠慮なういふて下され。

とく　ハイまたお願ひ申します。

紹由　丁度雨も霽れました、こりやついに無いお茶でございました。

（外へ出る、道具半まわり、吉野窓上手になり、此方音羽山の景、向より光悅出る）

光悅　オ、紹由殿、どこへござる。

紹由　オ、本阿彌樣、イヤありや一體何でございましよ。

光悅　あれとはそりや何の事ぢや。

紹由　（吉野窓をさし）向のあるじでございます、詫住居ぢやが其人品、殊に道をわきまへて、夫を思ひ、人に立てる、其取りはからひの美事さには、ほと〳〵感心いたしました。

光悅　ハ、、、、、まあ何と見えるな。

紹由　されば、あの氣高い所は、まあ上つ方の御落胤か。

光悅　いゝや、違ふ。

紹由　そんなら覺悟の好い所は、お侍の流浪したのか。

光悅　いゝや、ちがふ。

紹由　またあのゆかしい風情のあるのは、土佐畫でも拔けましたか、それとも變化か、妖怪か。

光悅　ハ、、、ありや吉野ぢや。

紹由　エ？（不審の體）

光悅　そなたの息子の思ひ者ぢや。

紹由　エイ！（驚く）

光悅　どうぢや、憎うはあるまいな。（ト微笑する）

紹由　これは思ひもよりませなんだ。（トあきれがほ）

光悅　もう勘當を免してやらしやれ。

紹由　ヘイ、あの人品なり、住居の體、さては伜の量見も大分すわつて居る樣でござりますが——免してやるには今一つ——

光悅　應山公への申譯か、それなれば丁度好い、今お館へ上つたら、一の茶碗をお見せなされ、どうぢやと仰せなさる故、取つて見ると面白い。利休が見ても得心しさうな好い出來と申上げたら、それは息子の作とやら、しかも元の名器を碎き、新に仕上げて返したとは、確に名手の腸ぢやと、殊の

紹由　外御賞美ぢや、もう遠慮には及ばぬて。

光悦　イヤそれは有難う存じます、それで申分はございませぬ。

とく　そんなら改めて逢ふが好い。（道具元へ戻る）おとく殿〳〵。（内へ入る）

光悦　（出て）ハイ〳〵ォ、あなたは――

とく　これから灰屋の嫁御寮ぢや。

エ？（ト不審がほ）

（三郎兵衞出る）

三郎　（紹由を見て）ォ、父様……（すがりつく）

紹由　三郎兵衞……（涙をこぼして手を取る）

光悦　勘當ゆりたぞ、喜べ〳〵

三郎　それは誠でございますか、有難う存じます。

紹由　イヤそれも全く（とくに向うて）こなたから。

光悦　吉野故に落ちぶれて、浮世の波に身を洗ひ、

三郎　吉野故にまた歸る家は誠に心の宿り、

とく　罪の深いは私の此身。

紹　由　イヤそれが却て今の喜、此世は時雨でござりますなあ。

（皆顔を見合せて喜ぶ體で幕）

大正十四年二月一日印刷
大正十四年二月五日發行
大正十五年八月一日再版印刷
大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集
第三卷

著者　松居松翁　高安月郊　山崎紫紅　伊原青々園　岡鬼太郎

發行者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　中塚榮次郎

印刷者　東京市下谷區二長町一番地　守岡功

印刷所　東京市下谷區二長町一番地　凸版印刷株式會社

發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座七八三番二一八八番
振替東京五二二九八番

（非賣品）